

ステイールパン工匠への道

園部 良

ある出会い

私は小さい頃から音楽が大好きでした。ラジオから流れてくる自分がいいと思った音楽を、カセットテープに録音しては繰り返し聞いていたものです。

音楽に身を委ねていると、心もワクワクするし、背中はずくずくして生活に欠かせないものとなっていきました。初めてお小遣いで買ったレコードは小学校五年生のときでした。深夜番組をよく聴いていた兄の影響もあって、選んだのは中島みゆきさんの「わかれうた」でした。

中学に入るとYMOにどっぷりとはまりました。少ないお小遣いから捻出しては坂本龍一さんの難解なレコードを買ったりもしたものです。

小学校、中学校、高校と勉強らしき勉強をしたことがありません。家に帰るとラジオやラジオから録音したテープを聴くという生活をしていたように思います。

生来学校というものが嫌いでしたので、危うく高校は留年しそうになりましたが、大学にだけは行ってみたいという願望から高校は何とか卒業し、その当時、好んで現代小説をよく読んでいたこともあって国文学科に入学しました。

大学というところは、それまでの学校とは違い自由でやりたいことが何でも出来ると思い込んで

いましたが、予想とは反して暗い鬱々とした学生生活が待っていました。

当時のバブル経済が生み出す浮かれた世相は肌に合わず、耳に入ってくるもの、眼に映るもの全てが軽薄に感じられ、バラエティ番組を見て談笑する家族の笑い声さえもいとわしく感じる位にストレスが募っていきました。

当然大学でも孤立し、満たされることのない心の欲求は増すばかりでした。そんな状況の中で唯一楽しみであったのは、映画や音楽や書物などの文芸作品群でした。自分でも何かを表現してみたいという欲求がその頃から募っていき、映画を撮ったり音楽を演奏したりしましたが、心を駆り立てる決定的なものに出会えず悶々としていた頃にある一つの出会いがありました。

当時私は、実家のある千葉県八千代市八千代台にすんでいました。駅前にも、とても小さいけれども非常にレアな作品群を置いているレンタルビデオ店がありました。そこで深夜まで借りるものが見つからず迷っていると、ピンク色のスリムジーンズを履いた怪しげな細身の店員さんは、閉店前なのにシャッターを閉め、「ゆつくり選んで下さい」とコーヒーを煎れてくれました。

後日、その方に誘われてお宅を訪問すると、彼の部屋は書物とレコードに溢れていました。その日を境に、週に一度くらいのペースで安酒

を持参してはお宅にお邪魔し、夜中まで森羅万象について語り合ったものでした。ある日、いつものように音楽を聴かせてもらいながら談笑していると、突然思いもかけない音楽が部屋に流れました。その音は旋律というよりも濃密な音の束のよ

ハンドパンの音の調べを確認する筆者



うで、激しく私の耳朵を震わしました。背筋がゾクゾクして最後まで聴いていられないほどの感動を覚えました。そのレコードのジャケットには、古びた円筒形の鍋をスティックで叩いている写真が載っていました。

トリニダード・トバゴへの旅

この日が私とスティールパンとの出会いの日となりました。

その日から約二年後、いい知れぬ焦燥感や苛立ちがピークに達し、一度リセットをするという意味で休学届けを出し、アルバイトでためた五十万円を手に、思い切ってスティールパン発祥の地であるカリブ海のトリニダード・トバゴ共和国に出



エアハンマーで鉄板を叩く



楽器づくりは繊細な技術を要するため、道具にもこだわりを持っている

掛けてみることにしました。日本からアメリカ経由で二十数時間、初めての海外旅行にしては長い旅程でしたが、何とか無事に着きました。着いたものの、当時はインターネットなどなかったので全くと言っていい程情報がなく、安い宿を探しては転々とするという旅になってしまいました。

スティールパンの製作現場やスティールバンドの練習場などを訪れる機会はありましたが、とにかく見るもの聞くもの食べるものなど全てが新鮮すぎて、南国特有の開放的な人間性にも触発され、毎日が瞬く間に過ぎていってしまいました。

当初はスティールパン製作を学びたいという気持ちもありましたが、安宿を求めて転々としていたので、ついぞ叶うことはありませんでした。帰国予定の前日には、街の中心部で政治的暴動が勃発し、近くの島に脱出するといったハプニングにも見舞われました。

その後大学に復学しましたが、ゼミの発表を終えたことを区切りに、結局何も得ることがなかった大学とは縁を切り、アルバイトを掛け持ちしてためた百万円を片手に、今度は絶対にスティールパン製作を学んで来るぞ、との意気込みで再度トリニダードに渡航しました。

何とかしてその技を学びたい、という思いで

数々の製作者の工房を訪ね歩きましたが、よそ者には絶対に技を教えない、と何度も断られました。何軒か回ってやっと「見てるだけなら来てもいいぞ」という人に出会いました。その日からは毎朝早くからその工房に通い、ひたすら手元を見続ける日々が続きましたが、何をやっているか、さっぱりわかりません。そのチューナー（調律師）が昼飯を食べに出ている間に、工房に半ば捨ててあったスティールパンをいじっては見よう見まねでチューニングを試みてみました。音が出来ては壊し、また次の昼休みに再度チューニングをすることを繰り返していたら、何となくチューニングの方法が解ってきました。その当時は、この楽器は職人の勘で作るものだと思っていましたので、自分にはスティールパンを作るセンスがあると思ひ込んでしまい、お金が尽きてきたこともあって帰国の途に着きました。

帰国後、ガソリンスタンドでドラム缶を調達しては、スティールパン作りを試みましたが、形は作れるものの音が一向に出て来ません。これは材質の問題なのかもしれないと思い詰めてしまいました。何度やっても結果は同じで、私はすっかりふさぎ込み、いわゆる引きこもり状態になってしまいました。そんな苦しいときに起死回生の思いで始めたのが輸入業でした。作れないのであれば既製品を輸入して自ら販売しようと考えたのです。開業の翌年、某公立高校吹奏楽部から大量にスティールパンを買いたいという注文が入りました。何とか三カ月後に納品しましたが、ふたを開けてみるとなんと三割の商品が不良品でした。即、交

LIFE IN THE PANYARD
(THE STEELBAND YARD)
THE HOME OF THE PANMAN



工場の壁に飾られた写真

換品を取ることを求められ、様々なルートから商品を買再輸入しました。それらも全て納品に値する品質ではなく、再度交換品を求められるという始末となりました。そんなやりとりが一年も続き、与えられた予算は全て使い果たしてしまいました。そして担当の先生から、納品していた三分の二の楽器も返品するので支払ったお金を全部返して欲しいと、最後通牒を突きつけられました。

試行錯誤を経て

私は、半ばヤケになり、開き直ってその申し出を即座に受け入れると、担当の先生は物の怪が取れたように穏やかになり、不良品の交換に変わる代替案を出してきました。それは、納品が完了していない三割の楽器を直せる人物を日本に呼んでみてはどうか？ というものでした。一瞬戸惑いましたが、友人の力を借りて思い切って熟練の調律師を日本に招いてみることにしました。

ほどなくして調律師が来日し、三割の不良品を見事に調律してくれて高校の一件は落着の運びとなりました。このとき、楽器輸入業というのは正にギャンブルであるとまざまざと知らされました。

その調律師は名前をデンゼルといいます。彼は帰国間際になってこう私に切り出しました。

「この機会に俺からスティールパンの理論と実技を学んでみないか」という思いもかけない言葉でした。高校でのデンゼルの繊細で丁寧な仕事ぶりに感銘を受けていた私は、二つ返事で彼の講義を受けることにしました。二週間の講義を終えたとき、それまで私が思い込んでいたものが一気に瓦解していききました。スティールパンとは決して勘で作るものではなく、確立した物理などの理論に裏付けされた楽器だったのです。その瞬間に私は、この楽器の製作を自らの仕事にしようと深く決意していました。

その日を境に、ドラム缶を叩ましては音作りに挑戦する日々が始まりました。

納得がいく楽器が出来るまでは三年の月日が流れていました。

一九九九年からは茅ヶ崎市にあるアレセイア湘南中学校からの依頼でスティールパン製作を授業で教えるようになりました(昨年の三月で終了)。

二〇〇〇年頃からは手持ちハンマーに変わりエアハンマーを導入し、月に三台くらいのペースで本格的に販売するようになりました。

その後、注文が途絶えることはなく、より良い楽器作りを追求しながら製作を続けました。

今から二年前位に大きな転機がありました。

某大学教授から一本の電話があり、円盤の振動実験を依頼されたのです。その依頼内容の説明を図面とともに教授から請けたとき、私はとても驚きました。そこに描かれていたものはあろうこと

か、スティールパンの進化系楽器「ハンドパン」に極似していたからです。もともとハンドパンの開発に興味があった私はそのオフアアを請けました。それからは、周波数や倍音などについて書かれた本を読みあさりました。実験を重ねるうちにますますハンドパンの開発を進めたいという意欲がわいて来て、一昨年末頃からは本腰を入れて試作機を作り始め、諸課題を克服しながら、昨年四月には純国産のハンドパンの販売を開始する運びとなりました。

ハンドパンはスティールパンとは違い、鉄板に化学的な熱処理を施します。また、音盤となる面にはくぼみをつけることが特徴です。形状は、丁度二枚貝といった感じで、UFOを想起させます。

スティールパンと倍音構造は同じなので調律方法にハードルは感じませんでしたが、独特の柔らかな音色を作る感覚はまるきり違うものでした。

昨年夏には、音色や弾き易さなどを改良したセカンドバージョンを発表しました。と同時にフェイスブックも立ち上げ、全世界へと情報を発信するようにになり、数多くの注文を頂いております。

ハンドパンはピアノなどと違い、例えばDマイナーのハンドパン、Gメジャーのハンドパンといったようにそれぞれに一つ一つのスケールを有しています。今後は、日本古来の雅楽などで用いられたスケールなども試してみたいと思っています。

今後より良い音色を追求しながら、このハンドパンを発展させていきたいと願う昨今です。

そのべりよう 一九六八年千葉県生まれ。スティールパン、ハンドパン作家。スティールパン発祥の地トリニダード・トバゴの工房で製作技術を学ぶ。現在は東京・大田区に工房を構えて製作を続けている。二〇一一年には大田区が制定した「大田の工匠二〇〇人」に選定された。